様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６９０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３３５８

研究課題名（和文）ガンダーラの植物文様の比較美術史的研究―ギリシア・ローマ的モチーフの仏教的受容―

研究課題名（英文）Comparative Art History Research of Gandharan Floral Motifs

研究代表者
田辺　理（TANABE, TADASHI）

創価大学・付置研究所・研究員

研究者番号：４０７５７２０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：申請者は国内外の博物館、美術館を巡り、ギリシア・ローマ美術とガンダーラの仏教彫刻に見られるガンダーラの仏教彫刻に表現された四種類の植物文－葡萄唐草文、木蔦文、アカンサス、花綱の図像を中心に資料収集し考察を行った。
　その結果、この四種類の植物文の中でも、葡萄唐草文やアカンサス文については、地中海世界のギリシア・ローマ美術に由来し、これらの植物文は、ギリシア･ローマ美術においては、死者の来世における再生復活を象徴するが、その象徴的な意味が一部のガンダーラの仏教彫刻にも受容されている可能性が大きいことがわかった。その可能性の検証を仏教経典に記されている来世観や死後の再生復活の思想に照らして行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ガンダーラの仏教彫刻に表現された植物文は、これまで内外の専門家によって、仏教的な意味がない単なる建築装飾であるから殆ど無視されてきた。これに対して、本研究は、従来の見解とは180度異なる新たな視点を加えて、植物文がもつ仏教的な意味を解明する、ガンダーラ仏教彫刻の研究史上初めての試みであった。
　また、本研究はガンダーラの仏教彫刻の図像と、ギリシア・ローマ美術の図像とを比較し、仏教経典の記述からガンダーラの仏教彫刻の意味を解釈する点において、比較美術史を主体とし、インド学・仏教学、建築史学さらに東西文化交流史などの方法論や知見を統合した、新しい研究のモデルを提示することができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：According to my research project, I visited several museums in Japan and overseas in order to collect research materials related to four types of floral motifs depicted both in Greco-Roman and Gandharan art: grapevine, ivy, acanthus and garland. As a result, it became clear that at least Gandharan grapevine and acanthus images were derived from Greco-Roman art in Mediterranean world and symbolize the rebirth in heaven after death. Furthermore, it is possible that the symbolism of grapevine and acanthus was adopted by Gandharan sculptors. By referring to descriptions in Buddhist sutras, I attempted to clarify that the grapevine and acanthus images depicted on Gandharan art are related to the Buddhist thought of rebirth in heaven after death.

研究分野：美術史

キーワード：ガンダーラ　植物文　葡萄唐草文　アカンサス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

パキスタン北部のガンダーラ地方では、ほぼ１世紀から３世紀にかけて、仏教的な内容をギリシア・ローマ美術の技法で造形化した折衷・混淆の仏教彫刻が多数つくられた。この仏教彫刻の未解明な部分の一つに、一見しただけでは仏教と関係があるか否かわからない図像（以下、非仏教的な外観の彫刻と呼ぶ）がある。それらは明らかにギリシア・ローマの異教的な美術の影響を示し、例えば、有名な葡萄酒の神であるディオニューソス神と眷属の飲酒饗宴図、花綱を担ぐエロースの像、ディオニューソス神と関係の深い葡萄唐草文や木蔦文、あるいはアカンサスなどの植物文、トリートーンなどの海の怪獣と呼ばれる図像などである。

従来のガンダーラの仏教彫刻の研究は、仏陀像や菩薩像、仏伝図のような、一見しただけで仏教と関連していることが判明する仏教的な外観の彫刻を中心として行われ、非仏教的な外観の彫刻は仏教的内容と無関係と見なされ、その意義が積極的に考察されてこなかった。しかしながら、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻も仏塔を荘厳していたものであるから、近年、そのような彫刻にも仏教的な意味があると見なし、考察が行われるようになった。しかしながら、ガンダーラの仏教彫刻に表現された植物文については、殆ど考察されてこなかった。

私はこれまで、ガンダーラの非仏教的な外観の彫刻を中心に研究を推進し、ディオニューソス神と眷属に関連する図像が、小乗部派仏教の生天思想と関連することを明らかにしてきた。生天とは、死後天界の楽園に再生、復活し、様々な快楽を享受することであり、仏教学では生天思想ともいう。私は、生天思想が、ギリシア・ローマ美術に表現された豊穣と再生の神でもあるディオニューソス神と眷属の楽園に再生復活する思想や、植物文に代表される再生復活の象徴性と対応するので、ガンダーラの仏教彫刻に表現された植物文を、生天思想によって解釈することができると考え考察を行うことにした。

２．研究の目的

本研究は、ガンダーラの仏教彫刻に表現された四種類の植物文－葡萄唐草文、木蔦文、アカンサス、花綱－が、単なる装飾ではなく、仏教の来世観に関係深い象徴的な意味を有しているか否かを、ギリシア・ローマ美術との比較考察によって明らかにしようとするものである。

これらの植物文は、地中海世界のギリシア・ローマ美術に由来し、ギリシア･ローマ美術においては、死者の来世における再生復活を象徴するが、その象徴的な意味がガンダーラの仏教彫刻にも受容されている可能性が大きい。その可能性の検証を仏教経典に記されている来世観や死後の再生復活の思想に照らして行うものである。

３．研究の方法

本研究では、以下の研究手順に沿って研究を進めた。

（１）　ガンダーラの仏教彫刻に表現された植物文の分類整理

最初に、以下の①-③に従って、四種類の文様を描写した彫刻を分類・整理し、その文様の特徴を分析した。すなわち、①文様が単独で表現されているか否か、②他の人物像と共に表現されているか否かを確認する。②の場合は、例えば葡萄唐草と木蔦文はディオニューソス神と眷属の図像（図）や仏伝図などとともに用いられ、アカンサスは、葉の中から神や供養者が出現し、花綱はエロースが担いでいる。③上記の四種の文様を表現した彫刻が、仏塔や仏塔階段のどのような場所にあったのか、その本来の位置を明らかにし、その植物文の仏塔建築上の用途・目的を推定する。

（２）ギリシア・ローマ美術に表現された植物文の分類・整理

ギリシア・ローマ美術では、建築装飾以外の陶器、金属工芸品、石棺などにもこれら四種類の植物文が表現されているので、多種多様な作品を博捜し、特に（１）と同種の植物文を分類・整理する。

（３）ギリシア・ローマ美術に表現された植物文の象徴的意味の考察

（２）で整理・分類した四種類の植物文の象徴的意味を明らかにする。具体的には、ディオニューソス神の楽園に再生復活する思想を表現した葡萄唐草文や、石棺を飾る花綱、納骨器を飾る木蔦文、コリント式柱頭のアカンサス文などの来世における再生と復活に関連深い植物文を、古典考古学や建築史の先行研究の成果を咀嚼して考察し、それらの象徴的意味を明らかにする。

（４）　ガンダーラの仏教彫刻に表現された植物文の象徴的意味の考察

（１）で分類・整理したガンダーラの植物文と、（２）で分類・整理した植物文が、図像面で対応することを明らかにした後で、ギリシア・ローマ美術の四種類の植物文とガンダーラ美術のそれらとの思想面、象徴面における対応関係を考察する。具体的には、ディオニューソス神の楽園思想、その他のギリシア・ローマの再生・復活思想と、仏教経典に叙述された宇宙論、生天思想との対応関係を考察する。その対応関係の考察を通して、ガンダーラ美術の植物文が生天思想を象徴するために仏教彫刻に表現されたことを明らかにする。

４．研究成果

①国内外の博物館、美術館における作品収集

本研究を遂行するためには、ガンダーラの仏教彫刻及び、ギリシア・ローマ美術に表現された植物文の図像の実見調査及び写真撮影を行うことによって、資料を増やさせなければならなかった。そのために、国内外の博物館と美術館を巡り、実見調査や写真撮影を行った。

ガンダーラの仏教寺院は殆ど破壊されており、元来の仏塔建築を装飾していた彫刻が殆ど散逸してしまっているので、彫刻が元々存在した位置を把握することは困難である。それ故、その欠を補うために、平成２９年度は、インド博物館所蔵のバールフットの欄楯や、サーンチーの仏塔の調査を行い、植物文がどの場所を装飾していたかを調査した。この調査のために、CANON 一眼レフ望遠交換 EF100-400LIS2 レンズ及びジッツオマウンテニア三脚 GT3532+雲台 GH3382QD キットを購入した。バールフットやサーンチーの調査では、植物文のみならず、今後の研究のために、これらの欄楯や仏塔を装飾していた彫刻を可能な限り全て、上記の望遠レンズと三脚を用いて、およそ 4000 枚の写真を撮影した。さらに、ニューデリーの国立博物館やインド博物館内のガンダーラやインドの仏教彫刻も実見及び写真撮影を行った。

平成３０年度においては、ギリシアのアテネ及びテッサロニキの博物館において植物文を中心に作品の写真撮影を行った。アテネでは、古代アゴラ博物館、アクロポリス、国立歴史博物館などを見学し、植物文を中心に写真撮影を行った。テッサロニキ及び近郊のヴェルギアナ、ペラなどでは、考古学博物館を訪問した。また、ベルリンに向かい、旧博物館において、ギリシア・ローマ美術に見られる葡萄唐草文や他の植物文を中心に、作品の調査及び写真撮影を行った。

最終年度では、インドのチャンディーガル、パトナ、マトゥラー、ニューデリーの博物館を訪問し、作品の研究調査を行った。チャンディーガルの政府博物館においては、植物文様の他に、仏説法図などのガンダーラの仏教彫刻の実見調査、写真撮影を行った。また、パトナにおいては、マウリヤ朝からクシャン朝の美術について実見し、一部写真を撮影することができた。マトゥラーにおいては、葡萄唐草文を中心に彫刻の細部の実見調査、写真撮影を行った。最後に、ニューデリーの国立博物館においてミーラーンの壁画などの写真撮影を行った。

②資料の考察結果

資金獲得後から、計画通り、ギリシア・ローマ美術に見られる植物文に関連する図像の分類及び整理を行い、これまで出版されているカタログの写真を基に、ガンダーラの仏教彫刻の四種類の植物文を抽出し、単独の植物文と、人物像が表現された図像（**図１**）に分類を行った。この考察によって、どのような人物像が植物文と共に表現されているのかが明らかとなった。

図１　木蔦文と花綱

平山郁夫シルクロード美術館蔵

特に、ガンダーラの仏教彫刻に見られる人物葡萄唐草文に、ディオニューソス神と眷属が表されていたので、葡萄唐草文の研究に関連するボストン美術館所蔵の縦型浮彫について、さらに考察を行った。本彫刻自体は、平成 27 年度に実見調査を行ったが、さらに考察を深め、調査によってさらに多くの資料を発見した。この縦型浮彫には、葡萄の蔓によって形成されたメダイヨンの中に、リュトンをもって酒を飲む男、女性の胸に手を触れる男、葡萄を収穫する男、葡萄を踏む男、狩猟する男が表現されている。この彫刻に表された人物像は全て、ディオニューソス神と眷属による飲酒饗宴や交歓の図像などとの関連が指摘でき、さらに全て死後の楽園を表現していることを明らかにした。また、ヨルダンのバールベックのバッカス神殿の門の側面に人物葡萄唐草文が表現されており、インドでは、一世紀の初めのサーンチーの大塔の四方の門が、仏伝図以外にも天界の情景や、吉祥文などによって装飾されている。また、西インドのマハーシュトラ州、ナーシクの二世紀に造られた仏寺の僧坊の入口には、ミトゥナと呼ばれる男女の交歓図が見られることから、ボストン美術館所蔵品も、左右側面に溝と枘穴を設けていることから、寺院の建物の入り口、門、仏龕の左右側面などを装飾していたものであると決定した。さらに、仏教経典との比較考察から、本彫刻に表現された図像も仏教における来世観、生天した天界にある楽園の情景を表していると結論づけたのである。この研究の成果は、『国華』第 1482 号に「ボストン美術館蔵ガンダーラ縦型石板の人物葡萄唐草文」という題目で刊行されている。また、2018 年 7 月 2 日にナポリで開催された国際学会である European Association for South Indian Archaeology and Art(EASAA)2018, 第 24 回大 会において “A Reconsideration of Peopled Vine-Scroll in Gandhara－Focusing on a Relief Panel owned by the Museum of Fine Arts, Boston－,” というタイトルで研究発表を行った。本発表は、上記の『国華』に載せられた論文の内容の細部を変更したものである。本学会発表の Proceedings として、同タイトルの拙論が

South Asian Archaeology and Art 2018 において掲載される予定である。その後、ナポリの学会で諸学者に指摘された点を修正し、2019 年 4 月 25 日に、「Peopled Vine Scroll, Gandharan Dionysiac Imagery and Buddhist Afterlife」という題目でミュンヘン大学(Lutwig Maximilians Universität) のインド学チベット学研究所において、同大学のイェンス・ウーヴェ・ハルトマン教授からの招待を受けて講演を行った。

この他、狩猟するエロースがアカンサス文や葡萄唐草文の中に表現されている例（**図２**）についても考察を行った。ガンダーラの仏教彫刻に表現された人物葡萄唐草文の中に表現された狩猟図を外観すると、それらには、弓矢や槍などの武器をもったエロースやクシャン族による狩猟の場面が表現されているので、帝政ローマ期の美術作品と比較を行った。この研究の成果については、2020 年 7 月に開催される予定であったスペインのバルセロナで開催される EASAA で発表する予定であったが、コロナウイルス蔓延のために、延期になった。

図２　狩猟するエロース　ペシャワール博物館蔵

これらの考察の他に、コルカタのインド博物館に復元展示されたバールフットの欄楯と、サーンチーの仏塔彫刻の調査を行ったことから、インド及びガンダーラにおける葡萄唐草文について考察し、その象徴的意味について明らかにした。この研究の成果は、期間内に論考を作成して雑誌に投稿することができなかったが、今後投稿する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 田辺理	４．巻 1482
２．論文標題 ガンダーラの仏教彫刻の人物葡萄唐草文の仏教的な意味について－ボストン美術館の作例 をめぐって－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 國華	６．最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Tadashi Tanabe
２．発表標題 A Reconsideration of Peopled Vine-Scroll in Gandhara－Focusing on a Relief Panel　owned by the Museum of Fine Arts, Boston－
３．学会等名 The European Association for South Asian　Archaeology and Art, 24th Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考